

■**中途視覚障害者に対するロービジョンケア** 視覚障害を「視覚の質の低下」ととらえると、高齢化社会にあつて、ロービジョンケアの「早期導入」がキーワードとなる。中高年の視覚障害を来す疾患とそれぞれにおける視覚保全のための注意点、失明予防の知識が重要である。感覚代行、保有視覚の温存と有効利用なども含め、具体的な指導ができることがこれからの医療者に求められている。一方、最先端の研究レベルでは、人工網膜、人工眼、視神経移植が注目されている。(田淵昭雄氏, 687 頁)

■**視覚障害者の能力開発と雇用の拡大** パソコンの発達と普及により、視覚障害者の情報アクセス環境は飛躍的に拡大した。しかし、三療への晴眼者の進出など、視覚障害者の雇用環境は厳しく、就業率は低い。わが国においては、視覚障害者に対する能力開発サービスが公的施設、民間施設で行われ、職業リハビリテーションサービスについては他の障害者と共通して地域障害者職業センター(日本障害者雇用促進協会傘下)で行われている。中途視覚障害者においては、雇用継続が望ましく、そのためには、職場でのキーパーソンを発見し活用することが重要である。(岡田伸一氏, 695 頁)

■**人工内耳による聴覚回復** 人工内耳は中途失聴者や聾者が会話を取り戻し、先天聾幼児が自由に話せるようになる画期的なリハビリテーション治療である。それだけに、聴覚だけでなく「会話」の成立への理解に基づく専門的な訓練を要する。諸外国に比し遅れている日本の政策の中で、「チルドレン・センター(東京)」を設立・運営している経験からの知見は傾聴に値する。(船坂宗太郎氏, 699 頁)

■**聴覚障害を補う機器と環境整備** 近年、ノンリニア、マルチメモリー化、多チャンネル化、デジタル化などのさまざまな補聴器が登場している。これらは日常の雑音の中での語音弁別能力を高めるための試みであるが、まだ期待の域を越えるレベルに達していない。補聴器フィッティングにおいても課題は多い。補聴器技能者および言語聴覚士に期待が寄せられている。また、補聴器以外にも、集団を対象とした補聴システム、難聴者支援機器が開発されており、これらも積極的な活用が望まれる。(細井裕司氏ら, 703 頁)

■**平衡覚障害のリハビリテーション** 平衡訓練は、前庭系・視覚系・深部知覚系に反復刺激を加え、できるだけ短時間に前庭性不均衡の中枢性代償、各系の相互作用の強化、中枢神経系の運動学習を成就させることを目的としている。平衡訓練の実際、適応と対象、訓練効果の評価方法を具体的に詳述していただいた。(長沼英明氏, 707 頁)

■**体性感覚障害のリハビリテーション** 体性感覚は、表在覚と深部知覚に大別され、さらに複数の体性感覚の統合過程で起こる複合感覚(2点弁別覚、触覚定位、立体覚など)がある。いずれも運動・行動と密接に関連している。サルの実験では体性感覚野に可塑性があることが示され、そのメカニズムには、unmask による急速な変化、sprout による緩徐な変化が考えられている。また、シナプス伝達効果の変化による機能代償もあり得る。感覚入力による感覚障害の機能的再構築は、すでにいくつかの示唆に富む報告があり、今後リハビリテーションの分野でさらに注目を集めると考えられる。(岡島康友氏, 715 頁)